

平成 21 年 6 月 9 日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19730562
 研究課題名（和文） テクノロジーを活用した障害のある高校生のための
 大学進学支援プログラムの開発
 研究課題名（英文） Development of a support program for the transition of students
 with disabilities to higher education
 研究代表者
 巖淵 守（IWABUCHI MAMORU）
 東京大学・先端科学技術研究センター・准教授
 研究者番号：80335710

研究成果の概要：

本研究では、障害のある高校生の大学進学支援を目的としたプログラムである DO-IT Japan を開発した。DO-IT Japan には、夏季の大学体験プログラム、ならびに年間を通じて行われるオンラインメンタリングプログラムが含まれる。大学体験プログラムの中では、大学進学を目指す高校生が、5日間親元を離れて大学に通う中で、大学進学と将来の就職、自らの能力を高めるテクノロジー利用、自己決定と自立生活などの内容を学び、自ら主体的に進学へ向け活動することを支援した。オンラインメンタリングプログラムでは、メールリストを通じて進学、就職、テクノロジー利用等に関する相談や支援を提供する環境を構築した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,800,000	0	1,800,000
2008年度	1,600,000	480,000	2,080,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,400,000	480,000	3,880,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・特別支援教育

キーワード：障害者教育・高等教育

1. 研究開始当初の背景

本研究の背景には、国内における障害のある子どもたちの極端に低い高等教育進学率の問題があげられる。現在、欧米の国々においては、障害学生が全学生の5～10%を占める高等教育機関が多数存在するのに対し、国内のほぼ全ての高等教育機関において、障害学生の占める割合は、それら欧米の値の10分の1にもはるかに及ばない。本研究の研究代表者は、障害のある優秀な子ども達の能力

が高等教育進学まで十分に育まれていないという極めて不幸な現状を、国内外の双方における障害学生支援活動とそれについての研究を進める中で痛感してきた。障害を持つ優秀な人材の育成を高等教育以前の段階から行う、という視点に立った対策が早急に求められる。

2. 研究の目的

本研究は、障害のある高校生の大学進学を成功へと導くプログラムの開発、ならびにその中で彼らの能力を高めるテクノロジーの活用を目指した利用効果を明らかにすることをその目的とする。従来の障害児の教育に関する研究、大学に在籍する障害学生の修学支援に関する研究、障害学生受け入れに関する調査とは、誰が彼らの成功へと導くのかに関する障害のある生徒本人の主体性に大きな違いがある。本研究に関連する他の学術的研究との違いを表1に示す。

表1 本研究と関連する研究の中心テーマとその結果を基に決定に携わる

中心グループ		
研究	中心テーマ	中心グループ
本研究	大学進学とテクノロジー利用	障害のある高校生
障害児の教育に関する研究	機能回復、機能補償	教員、支援者
障害学生修学支援に関する研究	大学・授業へのアクセス	教職員
障害学生受け入れに関する調査	受け入れの現状分析・把握	障害のある高校生、教育機関

3. 研究の方法

本研究では、高校から大学への移行に注目し、障害のある若者に対して高等教育への進学をアクセシブルにするための方策は何かを明らかにし、具体的な結果として以下に示す障害のある高校生向けの大学進学支援合宿プログラムの開発を進めた。その際、(1) 自己決定能力、特に自己主張能力の育成、(2) 自らの能力を高めるテクノロジーの利用、(3) 仲間やメンター(指導者)からの支援、を大学進学から就職へ向けた環境の移行を成功させる3つの重要なカギとして焦点を当てた。

本研究における合宿プログラムの概要

- 1週間親元を離れ、大学生活を体験する。
- 期間中大学教員や社会で活躍する障害のある先輩からの参加型授業を受講する。

- 障害のある同世代の若者達と出会う。
- 自らの能力を向上させる情報技術、支援技術について学ぶ。
- 自分が将来大学で何を学びたいか、卒業後どのような職業に就きたいかについて考える。
- 大学で受ける修学支援サービスの利用、自らの能力を高める支援テクノロジーの選択、
- 一人暮らしの実践に必要な知識・能力を養う。
- 米国のDO-ITプログラムとインターネットでつなぎ、双方の参加者の意見交換を図る。

4. 研究成果

本研究では、障害のある高校生の大学進学支援を目的としたプログラムであるDO-IT Japanを開発した。DO-IT Japanには、夏季の大学体験プログラム、ならびに年間を通じて行われるオンラインメンタリングプログラムが含まれる。

(1) 東京大学先端科学技術研究センターにおいて2007年7月25日~29日、ならびに2008年7月23日~27日に大学体験プログラムを実施した。期間中、大学進学を目指す高校生が、5日間親元を離れて大学に通う中で、大学進学と将来の就職、自らの能力を高めるテクノロジー利用、自己決定と自立生活などの内容を学び、自ら主体的に進学向け活動することを支援した。表2に大学体験プログラムのカリキュラムを示す。本カリキュラムは「ITスキルの習得」、「大学を知る」、「障害の理解」、「一人暮らしのイメージをつかむ」、「コミュニケーションの技法」を中心のテーマとして、理論と実習・体験面によって構成されている。

DO-IT Japan参加者は、受講や研究室訪問だけでなく、都内での電車を利用した通学や学生食堂の利用など、大学生活の様々な面を体験した。その際、大学生活を送る上で困難であることを具体的に検討し、支援が必要であれば、誰にどのように依頼するかについて考えた。一方で自らの得意なこと、興味・関心があることを活かすことの大切さが話し合われた。普段障害を持つ生徒が周りにいない高校生活を送っている参加者にとっては、同じ障害を持つ他の参加者とこれまでのこと、これからのことについて話す機会となった。他方、自分とは異なる障害を持つ人との出会いの中で、違いや共通する困難について理解する場にもなった。ロールモデルとなる障害のある先輩に出会い、将来の就労へ向けた様々な選択肢への気付きがあった。

表2 DO-IT Japan 大学体験プログラムのカリキュラム

テーマ	理論	実習・体験
IT スキルの習得	講義「学習に役立つハイテク」	コンピュータ・支援機器実習
大学を知る	講義「障害のある人の入試・支援の実際」	大学講義（複数） 研究室見学（ようこそトップランナー達のラボラトリーへ！）
障害の理解	講義「バリアフリーとフェアネス」	他の参加者や先輩当事者との交流
一人暮らしのイメージをつかむ	講義「家族から自立して生活する」	ホテル宿泊，通学
コミュニケーションの技法	講義「入試に活かす自己表現力」	企業訪問

参加者からは、大学体験プログラムから学んだこととして以下の点が聞かれた。

- 障害学生に対する大学側の配慮の現状
- 受験勉強だけでなく、どのように自分の生活を組み立て、管理するかを考えることの大切さ
- どのようなサポートが必要かを考え、大学や行政との交渉を恐れないこと
- 同じような境遇の仲間との出会いによる心強い連帯感
- 困難は、一人で挑戦するのではなく、他者とのつながりを大切にして共に協力しながら立ち向かうもの
- 社会的に困難な立場にあるからこそ、状況を変革できること

また以下のような感想が聞かれた（抜粋）。

- 今回の5日間は、僕に新しい自信と勇気を与えてくれました。
- 僕たち一人ひとりが自分自身というものをしっかりと持ち、生きていくことが大切だと強く感じました。
- これからは支援を受けることを恥ずかしながら、もっと積極的に暮らしていこうと考えています。
- わずか五日間のプログラムでしたが、この上ない貴重な時間を過ごし、一生の友人を得ました。
- 怖くはない。私を支えてくれる沢山の仲間がいるから。
- 一人ひとりとはやっぱり違うものなんだと気付かされました。
- 自分が大学で何を学びたいのかが意外なところからはっきりしてきているな、と最近感じています。
- 障害があることで抱える不安を話した

り、互いに励ましたりする同士ができました。

- 「障害者でもできる事ではなく、障害者だからできる事」をやっていきたくて強く思いました。
- 「DO-IT」で垣間見た新世界は、私にチャレンジする勇気を与えてくれた。
- 自分が障害を持っていることでできることがあることがわかりました。

(2) オンラインメンタリングプログラムでは、メーリングリストを通じて進学、就職、テクノロジー利用等に関する相談や支援を提供する環境を構築した。これまで、センター試験における配慮について、受験校の選択理由、板書を能率的に行う方法、数学に役立つソフト、留学についてなどの議論が交わされ、配慮申請を適切に進めるためのアドバイスが提供されてきた。

(3) DO-IT Japan プログラム参加者に対して、進学を進めるにあたり役立つ支援技術とコンピュータを1台ずつ提供し、その利用効果に関するインタビューを実施した。その結果、学習効果を高めること、情報を整理すること、コミュニケーションを図ること等について、これら支援機器やコンピュータが大いに役立つことが明らかになった。表2に DO-IT Japan プログラム参加者を支えるパソコンや支援機器についての抜粋を示す。

表2 DO-IT Japan 参加者を支える IT の例

<p>パソコン</p> <p>書くことや・消すことが困難であり、ノートを取るのに利用</p> <p>英文をスキャナで取り込み、読み上げさせるテストや模試でパソコンに回答を入力</p> <p>コミュニケーションを取るために利用</p> <p>文字を書くことの負担を軽減</p> <p>eラーニングの学習にパソコンを使用</p>
<p>ユーザー補助機能</p> <p>弱視のためマウスポインタを特大サイズに目の疲れで見えにくい際に拡大鏡を利用</p> <p>聞こえが困難なため、音声の視覚化のユーザー補助機能を使用</p>
<p>ICレコーダー</p> <p>ノートを取るのが困難なため、セミナーや講演会に参加した時などに役立てる</p> <p>難しい授業の理解に役立てる</p>
<p>マッピングソフト</p> <p>アイデアを整理するため、処理の流れを視覚的に把握するために利用</p>
<p>携帯電話</p> <p>電話での聞き取りが難しいため、メールでの連絡に活用</p> <p>辞書機能を勉強に利用</p> <p>緊急事態等で家族との連絡を容易に</p>

本研究の結果を受け、2009年度以降もDO-IT Japan プログラムが開催される予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

巖淵守・中邑賢龍・藤部和也, 社会を体験する, - DO-IT Japan 障害のある高校生のための体験プログラム -, リハビリテーション・エンジニアリング, 23, 72-75, (2008), 査読無

Burgstahler, S., Iwabuchi, M., Nakamura, K., How DO-IT Did It in Japan, Proceedings of the 24th Annual Pacific Rim Conference, CD-ROM, (2008), 査読有

近藤武夫・岡耕平・巖淵守, 高等教育における障害学生への合理的配慮の在り方 高次脳機能障害のある学生の大学入試特別措置申請におけるエビデンスに基づくニーズの把握・提案の支援事例から, ATAC Conference 2008 Proceedings, 91-95, (2008), 査読無
Burgstahler, S., Iwabuchi, M., Nakamura, K., How DO-IT did it in Japan: Learn how the DO-IT Scholars program for teens with disabilities at the University of Washington was adapted for execution in Japan in 2007, Proceedings of CSUN's 23rd Annual International Conference, CD-ROM, (2008), 査読有

巖淵守, 「障害のある中高生のための大学進学サポートセミナー」の開催, ノーマライゼーション, 27, 53-55, (2007), 査読無

[学会発表](計3件)

岡耕平・近藤武夫・巖淵守, 書き方ひとつで変わる受験環境～障害のある高校生が受験のスタートラインに立つために～, ATAC Conference 2008, 2008年12月7日, 京都国際会館

巖淵守, 障害のある高校生を大学へ, ATAC Conference 2007, 2007年12月2日, 京都市勧業館

巖淵守・中邑賢龍, DO-IT Japan 障害のある高校生のための大学体験プログラム, 第22回リハ工学カンファレンス, 2007年8月25日, 名古屋国際会議場

[図書](計0件)

[産業財産権]
出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

[その他]

報告書

DO-IT Japan 事務局編, DO-IT Japan 2007 Report, 1-23, (2007)

DO-IT Japan 事務局編, DO-IT Japan 2008 Report, DO-IT Japan 事務局, 1-27, (2008)

ホームページ

<http://doit-japan.org>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

巖淵 守 (IWABUCHI MAMORU)

東京大学・先端科学技術研究センター

・准教授

研究者番号: 80335710

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし